

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立岩泉高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 岩泉町

耕地面積は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、摂待川の流域に沿って集落を形成している。東日本大震災津波による小本地区の復興半ば、2016年台風10号（以下、台風10号）豪雨災害で町の多くが被災。また、2019年発災の台風19号でも小本地区を中心に被災した。

－参考値－

東西 51km 南北 41km（盛岡駅－北上駅間約 46km）
人口 9,407 人 4459 世帯（H30.12.31 現在）

2 岩泉高等学校

地域の青少年教育の必要性が高まる中、凶事・凶作の解決のために町立農業学校として 1943 年に設置された。現在は県立の普通科高校、岩泉・田野畑地域唯一の高校として、2013 年に創立 70 周年を迎え、今年度は 155 名の生徒が在籍している。

3 地域課題探究型学修「KIZUKI プロジェクト」

昨年度に引き続き、総合的な学習の時間に地域課題探究型学修「KIZUKI プロジェクト」に取り組んでいる。今年で 3 年目を迎え、プロジェクトの深化・発展期として今年度は取り組んだ。

プロジェクトの前半では地域の様々な組織との連携の下、生徒が地域と直接向き合い、自分自身と地域のつながり方を広げ、「ローカルな視点」と「課題を自分事として考える視点」に気づき、課題解決力の重要性を認識した。

「防災教育・復興教育」は KIZUKI プロジェクトの最後に「発展」として位置づけ、【「自分の未来像」を具体的に探るための「地域の実情」を知る】と銘打ち、体験・見学を行った。

プロジェクト全体を通して、キャリア教育で目指す「総合生活力」「人生設計力」の育成を意識しながら、復興教育の定義である 3 つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を育成・涵養した。

II 取組の概要

1 避難訓練（地震・火事発生想定）の実施（全校、10 月 8 日）地震発生後、校内化学室で火災発生を想定した避難訓練を行った。あわせて、2 年生の生徒 1 名が突如、呼吸停止となり倒れるという状況を作り、どのように生徒が実際に動くかを観察してみた。

2 地域課題探究学修「KIZUKI プロジェクト」

（1）全校向けガイダンス（5 月 10 日）

東北学院大学特任准教授の菊池広人氏による、「KIZUKI プロジェクト」のガイダンスと、地域課題について考えるワークショップを実施した。



〈全校ガイダンスの様子〉

（2）生徒各自の取組、仮説の設定（6 月～7 月）

菊池氏のガイダンスを受けて、岩泉町の現状と課題について、生徒がグループに分かれ、高校生の視点から課題を設定し、その課題を解決するための取組を考察して、ワークシートにまとめた。

（3）取組内容の検討（7 月 6 日、11 日）

地域課題解決のために各グループで考案した取組について、活動内容が実施可能かどうか、内容は適切かについて、岩泉町地域づくり支援協議会、岩泉町役場政策推進課を交えて検討を行った。

（4）活動実施（夏季休業中）

個人やグループで考案した地域課題解決の取組を、町内各企業・団体の協力を得ながら実施した。

(5) 活動の効果検証(8月23日)

夏休みに実施した活動について、フィールドワークや聞き取り調査を通じて効果を検証した。

(6) 活動の振り返り(9月17日)

個人・グループでの活動内容について、企画段階から効果・検証までの自分達の取組状況を、全校実施によるポスターセッションで発表した。その中で、成果と反省、新たに発見した地域の課題等についてまとめた。

(7) 文化祭(泉高祭)でのプレゼンテーション(9月28日)

9月に実施したポスターセッションで、とくに秀でた発表をした生徒によるプレゼンテーションを、地域の方々も参観される文化祭で行った。地域の活性化と復興をどのようにつなげていくべきか、歴史をどうつないでいくべきかなど、高校生からの視座による創造的な発表となった。



〈全校での振り返り活動の様子〉



〈文化祭でのプレゼンテーションの一部様子〉

3 復興教育(1・3学年)

(1) 事前学習(10月18日)

「KIZUKI プロジェクト」を通じて得た視点を基にして、岩泉町や近隣地区の復興の現状や今後の課題について仮説を設定した。

(2) 復興教育(10月29日・30日)

1年生は萩牛地区の三陸復興道路建設現場の見学や、震災津波、台風10号被災地を見学し、当時の被災状況や、今後の復興に向けた取組について学んだ。その後、事前学習で立てた仮説について検証・考察し、これまでの学習を振り返った。



〈復興道路のトンネル建設現場見学〉



〈旧田老温泉ホテルの跡地見学〉

3年生は、校内でHUG(避難所運営ゲーム)を体験した後、町内の台風10号で被災した企業(岩泉乳業)を訪問し、被災当時の状況や、被災後の取組について講演を聴いた。また、岩泉町危機管理官による台風10号による町内の被災状況や地理的要因、復興状況の進展についての講演を聴いた。



〈企業(岩泉乳業)での講演会の様子〉

【生徒の復興教育を終えての感想】

Q 岩手県は「いわての復興教育」として、「いきる」（生きる）「かかわる」（関わる）「そなえる」（備える）という3つの教育的価値を設定しており、命を大切にすることや家族や仲間、地域におけるつながりの重要性、防災についての認識を深めることの大切さを掲げています。あなたは、どの教育的価値を重視しますか。その理由を具体的に書いてください。

→ 「僕は『そなえる』を重視します。理由は、多くの国籍、年齢、健康状態、宗教、精神状態の人々が世界規模で存在している現在において、何も知らなかったから準備していなかったと、避難するときに言われても、困るだけだからです。例えば、イスラム教の人々が避難した時に、非常食に豚肉が入っていたら不快に思うに違いありません。様々な人のそれぞれのニーズに『そなえる』ことは、今の日本の防災教育に必要なものだと思います。それにに関する知識を持つことも大事だと思います。」

4 避難訓練

地震後、校内で火災が発生した状況を想定した訓練を実施。なお、2年生生徒1名が突如、火災等によるパニックによって倒れたときに、近くにいた生徒はどう行動するかという試みをしたり、一人の教員が心肺停止で突如倒れたときに、適切な処置を実践できるかどうかを確認したりした。

5 救急救命講習（1・2学年）

（2月14日）岩泉消防署職員を講師として招き、AEDの使用方法や、心肺蘇生法についての講習会を行う予定である。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

昨年度に引き続き、地域課題探究学修と関連させながら復興教育に取り組んだため、より地域の実情に即した復興教育を展開することができた。また、生徒が自分自身の進路選択についても考える機会ともなった。

地域や自分の深めてみたい課題を自分達で考察し、解決に向けて取り組んでいく中で、地域との繋がりを再認識し、地域に支えられているという意識が芽生えた。積極的に地域と関わっていこうとする生徒や、校外の活動に意欲的に参加する生

徒の姿も見られた。

振り返りの中で、「自分で考える力がついた」、「相手の立場でも考えられるようになった」、「具体的に物事について考える場面が増えた」と言った反応があり、目的としていた課題解決力や価値生産力の成長が見受けられた。

2 課題

本校での課題探究学習においては、昨年度に引き続き、生徒自身が活動することに主眼を置いていたが、活動に対して消極的な生徒に対する手立てが必要となる場合があった。教員はコーディネーターとして生徒との繋ぎ役を担ったが、どこまで助言等をすべきか、あるいはしない方がいいのかの境界が不明確であった。教員の役割の在り方を模索・検討していく必要はあると痛感した。

生徒自身に地域の協力機関との打合せも行わせたが、打合せの内容が不十分であったり、生徒の検討が浅い段階であったりしたため、活動内容の変更を余儀なくされることがあった。協力機関に迷惑を掛けてしまう事例があった。また、協力機関とのより良い打合せや活動内容の検討のために、マニュアルの配付や事前学習を行う等の準備が必要であった。また、地域と学校との協同性も欠かせない。

地域だけで復興の在り方を考えるのではなく、広く社会や世界との関わりの中で、復興の在り方を考える復興教育を展開していきたい。そのためには、やはり学んだ知識を総動員させる関連づけ（レリバンズ）が鍵となる。ただ学んで終わりにさせずに、地域→日本社会→世界に還元できるような「深い学び」を構築していきたい。